

成人 ASD 者の自己の記憶に関する研究

～後悔に着目して～

○山本健太 増本康平

(神戸大学大学院人間発達環境学研究科)

KEY WORDS: 自己の記憶 後悔 感情

目的

近年、ASD 者のエピソード記憶のなかでも自己の記憶の低下が注目されている。一般的に、自己と関連のある出来事は記憶に残りやすい(自己参照効果)。しかし、ASD 者には自己参照効果がみられない(e.g., Toichi et al., 2002; Grisdale et al., 2014)。エピソード記憶の低下は日常生活で重篤な問題を引き起こすことが報告されている(白川ら, 2007)。

記憶は単に情報を蓄えるだけのものではない。自己の記憶には、次の行動選択、感情のコントロール、コミュニケーションの促進など我々が日常生活を送る上で重要な役割がある(Bluck et al., 2005; Holland & Kensinger, 2010)。

自己の記憶の一つで行動選択に重要なものに後悔がある。後悔とは、違う決定をしていたら今の状態がもっとよくなっていたかもしれないと想像したときに感じるネガティブな記憶である(Zeelenberg & Pieters, 2006)。しかし、後悔はネガティブな面だけでなく、“次はこうしよう”といった行動修正できるポジティブな面もあり、うつ病予防や次のよりより行動選択につながる(Roese, 2005)。ところが、ASD 者は定型発達者(TD)よりも後悔を感じる程度が弱いことが報告されている(Zalla et al., 2014)。成人 ASD 者の問題に、うつやひきこもりといった社会不適応がある。このような不適応の背景には失敗を繰り返さない行動修正がうまく働いていないことが考えられる。

後悔研究では、後悔は「～やっておけばよかった」と感じる後悔と「～やらなければよかった」と感じる後悔に分類される(塩崎・中里, 2010)。これまで ASD 者の後悔に関しては、やっておけばよかった、やらなければよかったと感じる後悔に着目した研究は報告されていない。そこで、本研究では成人 ASD 者の後悔の数に着目し、TD 者と違いがあるのかを検討する。ASD 者は自己の記憶が低下していることから後悔の程度が弱く、TD 者よりも後悔の数が少ないと予測される。

方法

成人 ASD 者 14 名(平均年齢 30.5 歳(6.86), 平均 IQ103.64 (9.94), 平均 AQ 34.29 (5.06))と成人 TD 者 16 名(平均年齢 27.88 歳(10.1), 平均 IQ106.38 (12.58), 平均 AQ 15.44 (4.56))に対し、半構造化インタビューを実施した。質問項目は以下のとおりであった。

Q.「これまでの人生の中で、やらなければよかったと思うこと、やっておけばよかったと思うことは何ですか?」と教示し、自由回答を求めた。やっておけばよかった/やらなければよかったの分類については、調査者が参加者に逐一確認をおこなった。

表 1 各変数と後悔の相関関係

変数	ASD	TD	相関関係							
			A	B	C	D	E	F	G	H
A. 総想起回数	ASD	3.93 (1.49)	1	.83**	.69**	-.19	-.03	-.57*	.35	.18
	TD	2.19 (1.47)	1	.95**	.57*	-.20	.004	-.34	-.34	-.22
後悔 B. やっておけばよかった後悔	ASD	2.5 (1.1)		1	.17	-.22	.10	-.23	.35	.06
	TD	1.86 (1.26)		1	.29	-.20	.03	.08	-.29	-.19
C. やらなければよかった後悔	ASD	1.43 (0.85)			1	-.05	-.18	-.69**	.18	.24
	TD	0.31 (0.48)			1	-.08	-.06	-.12	-.28	-.19
感情調節 D. 再評価方略	ASD	21.14 (8.47)				1	.37	-.20	.26	-.33
	TD	27.88 (7.44)				1	-.05	-.17	.30	.01
E. 抑制方略	ASD	13.93 (5.44)					1	-.35	.36	-.23
	TD	12.5 (6.04)					1	-.21	-.65**	-.19
気分 F. 抑うつ	ASD	18.5 (11.9)						1	-.24	.20
	TD	6.56 (5.47)						1	.03	.37
G. 主観的幸福感	ASD	3.43 (0.86)							1	-.24
	TD	4.81 (0.79)							1	.001
障害程度 H. AQ total score	ASD	34.29 (5.06)								1
	TD	15.44 (4.56)								1

*p < .05, **p < .01

その他の測定項目として、WAIS-III、日本語版感情調節尺度(吉津ら, 2013)、日本版 BDI-II ベック抑うつ質問票(Kojima et al., 2002)、日本版主観的幸福感尺度(島井ら, 2004)、日本語版自閉症スペクトラム指数(AQ)(若林ら, 2004)を実施した。

結果

想起回数について、群(ASD, TD) × 後悔(やっておけばよかった, やらなければよかった)の 2 要因分散分析をおこなった。群と後悔に有意な主効果がみられたが

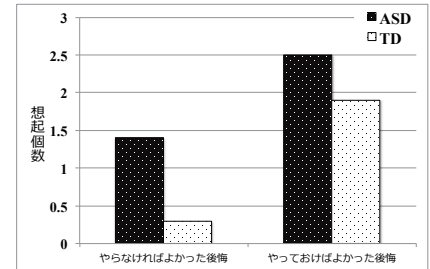


図 1 ASD 者と TD 者のやらなければよかった後悔とやっておけばよかった後悔の回数

(群 $F(1,28) = 10.327, p < .01$, 後悔 $F(1,28) = 333.836, p < .001$), 両要因間に有意な交互作用はみられなかった($F(1,28) = 1.176, n.s.$)。これらの結果から、ASD 者は TD 者よりも後悔の数が有意に多く、群にかかわらず、やらなければよかった後悔よりもやっておけばよかった後悔の数が有意に多いことが示された(図 1)。

各変数間で相関分析をおこなったところ、ASD 者ではやらなければよかった後悔と抑うつとの有意な負の相関関係がみられた。つまり、ASD 者はやらなければよかった後悔が多ければ、抑うつは低い(表 1)。

考察

本研究の仮説では、ASD 者は自己の記憶が低下しているため後悔を感じる程度が弱いことから、TD 者よりも後悔の数が少ないと予測した。結果は仮説と異なるものとなった。この理由として、日常生活では ASD 者は失敗経験を重ねることが多く(近藤ら, 2009)、後悔する頻度が多いため想起回数が増えたと考えられる。

一方、相関関係の結果について、やらなければよかった後悔は、言い換えればやってしまった後悔である。この後悔は抑うつが低く活動的な人であるからこそ経験する後悔である。本研究に参加した ASD 者は全員が就労移行支援事業所の所属しており、日常的に活動をおこなっている人であった。抑うつが弱く活動的であることが負の相関関係を示したと考えられる。

本研究は平成 29 年度公益財団法人倶進会の研究助成を受けて実施した(YAMAMOTO Kenta, MASUMOTO Kouhei)